
東方村人C

青大将

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方村人C

【Nコード】

N4487V

【作者名】

青大将

【あらすじ】

線路にダイブしたと思ったら幻想郷でした、マル

会社員C - 01 (前書き)

東方二次創作、オリ主が登場します。
オリ主が生理的に受け付けられない方は、
戻るをクリックすること
を推奨します。

会社員C - 01

その日、彼―社会人C（28）―はフラフラと歩いていた。

理由は簡単、会社の接待で浴びるほどの酒を飲まされたからだ。

フラフラ、フラフラと電燈に誘われる蛾や蠅のように歩き。

気づかぬうちに警告音を鳴らしながら赤い点滅を繰り返す区画に入ってしまった。

一瞬眼の前が明るく輝き、巨大な何かが自分にぶつかる映像をしかとその眼で見て、彼の意識は途切れた。

…ドボンッ

何がおきたのか全くわからない彼は気づけば水の中にいた。

『え、なに？何事？』

彼は必死でもがき、水面から顔を出して精一杯息を吸い込んだ。

『…田舎臭い。』

彼は今までいた場所と違う空気を感じ取った。

幸い背を伸ばせば足が届く場所のようで、あつぶあつぶしながら岸までたどり着いた。頭のから足の先までしつぽりと濡れて、すっかり酔いは醒めていた。

「……どこよ、ここ。」

彼はぽつりと呟いた。当然の疑問である。彼の持つてる記憶では、今自分が本来置かれている状況は面倒な接待を終えての帰路だったはずなのだから。

辺りを見回す、時分は夕暮れ時だろうか、赤い太陽がかすかに見える。

夕焼けを見て少し落ち着いた彼は、記憶を整理することにした。

彼の記憶は踏み切りに入り、そこが危険な場所だったということまでをしっかりと思い出すことが出来た。結果、当然この考えに行き着く。

「三途の…川…。」

彼は振り向き、川（？）を見てそう呟いた。

「マジかよ…俺、死んだのか…？」

川と呼ぶにはやや広い水溜りを見ながらうなだれた。

「ハハ、これが現実かよ…28年も生きて、灰色の人生を送って、その締めくくりが酔っ払った拳句の線路内人立ち入りかよ…。」

誰に向けてというわけでも無く愚痴りだした。

「…電車内の皆さんごめんなさい、終電間近だっというのに電車止めちゃって…。帰れない人とかマジごめんなさい…。」

愚痴がすむと今度は謝罪を始めた。

「…大体なんなんだ、なんで特に悪いこともしない俺が天国じゃなくてこんな田舎臭いところに飛ばされなきゃいけないんだ!？」
謝罪が終わると謎の怒りを空に向けて吐き出した。

「誰だかしらねーけど、ばかやるー!! 政府は責任をとれー!!」
行くあての無い怒りを政府に向け空に吐き出した。

「はあ、すっきりした。さて、ここが天国か地獄か調べないとな。」
踵を返し、歩き出そうとする彼に声がかかった。

「その必要はないわ!」

空中に社会の窓が出現していた。

「よおこそ、天国でも地獄でもない場所へ。」

社会の窓から何ものかが語りかけてきた。

「ここは幻想郷、忘れられたものたちの流れ着く場所。」

社会の窓は続ける。

「あなた、どうも迷いなく踏み切りに突入してたから自殺志願者か
と思ったら…違ったようね。」

どうにも失礼なことを言ってきた。確かになんて事はない人生だが、死ぬ事はまだ保留しておきたい程度には生きているつもりだった

「で、なんで俺はその幻想郷とやらに？」

彼は当然の質問を聞いた。

「そうねえ、…間違いでしたじゃ怒りそうだから、面白そうだった

から…っていうのは駄目？」

わけのわからないことを言う社会の窓だった。

「つまり間違いでつれてきたんだな？」

あきれ半分、怒気半分で彼は聞き返した。

「なら早く、ここから元の場所に戻して―」あら、それは無理よ。」

社会の窓がさえぎった。

「あなた、覚えて無いの？あなたを今元の世界に戻すと、踏み切り内から再スタートよ？」

あつと彼は声を上げた。

「そんなわけであなただは戻ると死ぬわ、ここでなら生きていられないことも無いのだけれど。」

希望をちらつかせてから社会の窓が決定的なことを言った。

「まあどの道、このままだとこの辺りの妖怪に食われて死ぬわね。」

もつとも、そもそもはそのためにつれてきたのだけれど。」

妖怪…？何を言っているんだ？と彼は思った。

「あら、何を言っているんだ？って顔してるわね、そうね、そのまま死んでも別に困らないのだけれども。」

笑い声と困り声が混じった声で社会の窓が言った。

「本来ならば外の世界で死んだことになるはずだった真つ当な人間をこちらの世界に手違いで引きずり込んでしまった事は、さすがにこちらのミスと認めなければならぬわね。」

悪びれる様子もなく続ける。

「だから選ばせてあげるわ、外の世界で死ぬか、この世界で生きてみるか。」

社会の窓の分際で、性質の悪い二者択一を迫ってきた。そんなもの決まってる。

「答えは決まったみたいね、ならこの川にそって下りなさい。結果を張ってあげたから人里まで多分たどり着けるわ。」

そついうと社会の窓から手が出てきて川を指差した。

「まあ、信用できないならそこで野宿してもいいけど、多分絶対に

死ぬわ。」

そういつと社会の窓はぴっちりと閉じた。最後に一言残して

「さっき言った面白そうっていうのも事実よ。それじゃ、さよなら。」

…何がなんだかわからないが、川に沿って歩かねば死ぬというのなら歩こう、そう決めて彼は歩き出した。

会社員C - 02 (前書き)

東方二次創作、オリ主、オリキャラが登場します。

オリ主が生理的に受け付けられない方は、戻るをクリックすること
を推奨します。

薄暗くなった道を川に沿ってひたすら歩く、気づけば森の中にいた。歩く、歩く、時々怖くなって少し走る。その繰り返し。

幸い、川の水面がぼんやり光っているので川にダイブということにはなりそうに無い。

結界ってこれのことか？そんな答えの出ないようなことを考えながらひたすらに歩く。

見知らぬ地での夜は常識ある人間にとって恐怖だ、それが森の中にならなさら。

事実1時間ほど前に一度彼は恐怖で若干気が触れ、オピョピョピョピョー！と奇声を上げながら森を疾走していた。

「いつになったら着くんだよ…社会の窓め…」
不平を口にし後ろを振り返り怖くなって走る。

走り続けて息が上がってきたころ、数刻ぶりに人工物が見えてきた。洋館だ。

「……………」

ここで想像して欲しい、あなたがもし夜の森で得体の知れない洋館を見つけたらどうするか、

まして、その洋館の周囲に人型をした何かが浮かんでいたらどういう行動を取るか、

当然こうなる、彼は息が上がっていることも忘れて全速力でその場から駆け出した。

そうするとどうなるか、やはりこういうお話上、当然こうなる…そう、川にダイブだ。

本日二回目の水中ダイブにて薄れいく意識の中で彼はこう思った。

『…これ、踏み切り戻っても大差なかったんじゃ。しかし…今日水に飛び込んでばっかだな俺。』

そこで彼の意識は途切れた。

「ツァ！」

翌日彼が目覚めたのは日が高く上ってからだった。

起きてすぐ、二日酔いの頭痛に襲われ彼は再び仰向けに寝転んだ。

「さて、どこだこは。」

そこは見覚えのない天井だった。こういう場合、自宅で目覚めて夢落ちが相場であるべきだろう、と彼は思いつつも辺りを見回した。木で出来た、古めかしい家だった。あと、男が一人椅子に座って寝ている。…見張り役だろうか。

見張りが寝てちゃ意味無いよなあ。などと考えながら起き上がり伸びをしながら水が無いかももう一度辺りを見回す。二日酔いがひどい水ならば昨夜溺れた時に大量に飲んだはずなのだが。

「…ふあああ…おっと、兄さんお目覚めかい？」

見張り役の男が目覚めたようだ。

「さて、兄さん、何が欲しい、水か？朝…昼飯か？それとも…説明か？」

…何やらこちらの事情をなんとなく察してしてくれるタイプの男のようだ。話が早くて助かる。…とりあえず、

「み、水…。…水を。」

頭が痛すぎて全部順番に頼むなどとはとてもではないが言えない状況だったのだ。

「…申し訳ないです。水と粥まで持ってきてもらって。」

二日酔いの呪縛から解放された彼は素直に礼を言った。

見張りの男は笑いながら、

「ははは、何、二日酔いなら仕方ねえ、それでどうする？最後に説明が残ってるが。」

そう提案を持ちかけてきたので、特に断る理由も無い彼は承諾しよ

うしとしたが、

「あ、ちよつと待つてくれ兄さん、先に兄さんの事情を聞いてもいいか？」

と、別の提案をしたのであった。

「構いませんが、大した話ではないですよ？」

彼がそう前置きをおくと男がうなづいたので彼はここに至るまでの経緯を男に話した。

酔っ払って踏み切りに入ったこと、気がつくと三途の川（？）のほとりにいたこと、社会の窓のような何かからここが幻想郷と呼ばれる場所だということ、その窓に川を下るよういわれ足を踏み外し川に落ちたこと。

話を聞き終えると男は。

「そうか、隙間の勘違いでここに連れてこられたわけだな、お前さん。」

男はさっぱりとそういった。

「勘違いなんですかね。まあ、勘違いだとしても本来あの踏切で死んでるはずだったんですから、こうして生きていられるのは儲け物と考えてるんですけど。」

彼は正直なところを男に告げた。

それを聞いた男は笑いながら、

「ははは、そうだな、そう考えりや確かに儲けものだ。」

そう言い、その後さらにと大事なことを言つてのけた。

「しかし、ま、困ったことに実は隙間が幻想郷にご案内するのは自殺志願者かどうしようもない犯罪者の二択なんだなこれが。」

男はそこまで話して少しだけ真面目な顔つきになった。

「前者なら大抵死ぬんだが、後者だと生き残つてここまで来ちまう事がある。お前さんは川に飛び込んだから前者だと思つたんだが……どっちでもなかったみたいだな。」

少しほつとした空気が流れた。

「後者の人間だった場合ここの説明をするわけにもいかなくなる、

なんてたつて重罪人が多いからな、そういうわけでお前さんの事情を聞かせてもらった。すまなかったな、何もわからないのに話させてばかりで。」

男はそういうと頭を下げた。

「しかし、隙間じきじきの道案内となると…お前さん、あの面倒なのに入られちまつたらしいな。」

面白いものを見るように、男は眼を細めた。

「さて、そろそろ事情を説明しないと、お前さんもいきなりこんなわけのわからないところに飛ばされて戸惑ってる、そうだろう？」
神妙な顔つきになり、男は話を始めた。

「隙間…お前さんが見た社会の窓がそれだ、ああ見えてあいつは大妖怪なんだ、この幻想郷の管理をしているくらいだな。その隙間が言つたとおり、ここは幻想郷、外の世界で忘れられたものがここにたどり着く。さて、お前さん、外の世界にいたとき妖怪を信じていたかね？」

男は問いかける。答えはノーだ。

「そういうことなんだ、外の世界じゃ誰も妖怪を信じていない、つまり妖怪という存在は外じゃ忘れられちまつたんだな。他にも…こんなものもあるぜ。」

男が上の段に氷を入れる形式の冷蔵庫から缶を一本取り出した。コ

○。コーラによく似た缶だが…

「ば、バニラ・コ○。コーラ…！」

彼は驚きを口にした、元いた世界では何年も前に発売されなくなっていたものだ。

「他にも…、ほれ。」

そついうと緑色の液体が入ったペットボトルを取り出し、彼の前に置いた。

「ペ、ペ○シ・キューカンバー…！」

彼は理解した、確かにここは忘れられたもののたどり着く場所だと。「わかつていただけたみたいだな、さて、そんな幻想郷なんだが、

妖怪がいる以上当然人間は襲われるわけだ。」

命に関わる重大な事柄を、あっさり男は口にした。こうしちゃいられない。早く逃げないと。

「まあ、落ち着け。襲うって言ってももう形骸化しちまつてるんだ。」

何をわけのわからないことを、妖怪が人間を襲うのなら俺はこんなところにいられるか！と、彼は逃げようとした。

「だから落ち着けて、妖怪が無作為に人間を襲ったらどうなる。人間がいなくなっちまうだろ。」

男はその辺りも含めて再度説明をした。妖怪のこと、人間のこと、その相互関係の上で人間を襲うことが最早形式上になってしまっており、今は妖怪ともそれなりの仲を築けていること。

「つまり、争うって概念はまだここに流れ着いてないわけか……」
彼は口にした。

「面白いことをいうな、外の世界じゃまだ争いが耐えないって割とよく聞け。お前さんの所でもそうだったろ？まあなんだ、妖怪たちのほうがはるかに俺らより上の存在なんだ。悔しくもならないくらいにな、実際良い奴も多い。ま、争いつてのは同レベルの者同士でしか起こらないってのの典型例かな。」

そう言つて男は立ち上がった。

「まあ詳しい話は寺子屋にいる先生にでも聞いてくれ。あいにく俺はそんなに学のあるほうじゃあないんだ。おっと、来たようだ。」

そういうと彼は玄関から男を一人迎え入れた。

さして人間と容姿は変わらないが、頭頂部が禿げ上がって……失礼、頭頂部に皿の乗った男が部屋に入ってきた。

会社員C - 03 (前書き)

東方二次創作、オリ主、オリキャラが登場します。

オリ主が生理的に受け付けられない方は、戻るをクリックすること
を推奨します。

現状、野郎しか出てきません。

村はずれの療養所の小屋の中に、男の悲痛な声が響き渡る。

「じ、地味だ…。なんで…こんな…これなら無い方がまだ…」

彼はそう愚痴をこぼした。

彼に発現した能力は『植物に適した土壌と肥料がわかる程度の能力』
余りにも落ち込んだその様子を見ていた二人も、多少申し訳なさそうに、

「ま、まあ悪い能力じゃあねえよ。これで里の畑の収穫高が上がるわけだしな。」

「そうだぞ、盟友、…まあ若干地味とはいえるけど決して悪い能力じゃあないぞ、あんまり強力な能力に目覚められると片付けなきゃいけないかったしね。」

ちやっかり河童が物騒なことを言っただけ。

そんな言葉も耳に入らないくらい凹んで彼はぼやく、

「おい、おかしいだろ…こういう非日常に巻き込まれた場合なんかこう、すごい能力が手に入るもんじゃないのか…。じゃあ何のために俺はここに…。」

消沈の根は深そうである。

どうしてこんなことになったのか、話は数刻前に遡る。

「紹介する、河童の河童Fだ。」

部屋に入ってきた頭頂部がキラリと光る男を、親指で指差し男は言った。

「…っと、俺の自己紹介もまだ済ませてなかったな。俺は一応この里の次の長…ってことになってるけどいつまでたっても現役が死なないからまだ普通の村人に収まってる男だ。」

回りくどい自己紹介を男は済ませた。

なるほどなるほど河童ね、さて…逃げるか。

「おっと、逃げようとするなよ。大丈夫だ、こいつは信頼できる男だ。」

男はそう言い、彼を押さえつけた。

彼は叫んだ。

「な、何言つてやがる、河童だぞ、妖怪だぞ！！そりや逃げる、猿だつてわかる、妖怪からは逃げる。それが人間なの！！」

さつき説明したはずなんだが…、男はやれやれといった様子で言った。

「お前…さつきの説明聞いてたか？ナウい妖怪は人間襲わないんだつて、必要が無いからな。それにこいつはこの里にいろいろ便利なものを持ち込んでくれるナイスガイだぞ。今日もお前のために割と無理言つてきてもらつたんだ。」

男は諭すような口調で彼に言った。肩を押さえられ諭された彼は少し落ち着きを取り戻し。

「ああ、も、申し訳ない。話は聞いていたが…こう、いざ目の前に現れられると…やっぱり。」

彼は本当に申し訳なさそうに応答をした。男はその様子を見てククツと笑いながら

「まあ外来人なら普通っちゃ普通の反応だ。今までも何人かお前みたいに取り乱した奴はいたよ。まあ妖怪の中には、そういう取り乱した姿を見ると血が滾つちまう奴もいるらしいからあんまり推奨はできないがな、その態度。」

諭すような口調で男が続ける。

「まあそういう点でも信頼できる男だ。河童つて種族は基本的に俺ら人間に友好的だが中には滾つちまう奴もいてな…まあ、こいつは大丈夫だ…ヘタレだからな。」

男が振り返り河童を見る。河童は不平を口にした。

「あはは、ひどいなあ盟友、まるで僕がヘタレみたいな。さすがに

僕だってあの反応を見たら……。あ、ごめん滾らないわ。」

河童は笑いながら言った。

「な、ヘタレだろ。ああまあ技術力は本物だから安心してくれ。」

あ。ここ笑うところか、彼はそう判断し笑って質問を口にした。

「で、えーとわざわざ河童Fさんに来てもらって、何が始まるんです？」

そんなわけで話は冒頭に戻る。

消沈しっぱなしの彼だが放っておくわけにもかかず、河童は次のステップを提案した。

「さて、次は…見なくても大体見当はつくけど一応魔法属性でも見とおこうか。」

河童がそう提案をする。

「まあ見なくてもわかるがな、地属性だろう、能力的に。」

男が先に結論を言ってしまう。

「やめてくれ！これ以上俺に地味な属性を付与しないでくれ！！能力が救いようも無いのに地属性とか…もつとこう光とか闇とかそういう属性であるべきなんじゃないの！！？」

彼は半狂乱で叫ぶが、河童がその手を取り、人を超えた力で

「はいはい、おとなしくここに手を置こうねー。」

と、五行図の描かれた鉄板に彼の手を置いた。

鉄板に描かれた五角形の一つの頂点に光がともった。

「あー…やっぱり地属性だよ、残念だったね。」

河童が気の毒そうな声で言った。

「おいおい河童F、残念とは何だ。地属性だって生きてるんだぞ。それに今里の地属性の女が子供を授かって畑仕事を休んでるから、ちようど地属性の人手がほしかったところだ。」

男がフォローとは思えないフォローを入れる。

「あ、でも待つて、一応木の属性も多少あるみたいだ。能力的に植物関係だからだね。」

河童のいうとおり、五行図の別の箇所にも仄かに光がともっていた。

「あ、何、ひよつとして二属性つてすごかったりする？」

彼はちよつとうれしそうに瞳を輝かせて尋ねた。

「いや、全然、湖の近くの館には、火水木金土に月と日の魔法を使う七曜の魔女がいるつて話だ。」

きつぱりと男が切り伏せた。

「それに木と土か…厄介な目覚め方したな、メインが木ならいいんだがメインが土となると木に抑制されてあんまり伸びないぞ。」

そういつて、男はさらに追い討ちをかけた。

「やめるオ！！これ以上不幸な知らせを聞かせないでくれエ！！」
彼はがつくりうなだれてしまった。

「まあこの後に火あたりを何とか身につければ、そこそこの伸びは見れるんじゃないかな？もつとも、普通の人間に三つも属性を扱えるとは思えないけどな。」

河童もフォローとは思えないフォローを彼に向けた。

「地属性…地属性…地属性……。」

彼は余りのショックでうなだれながら呪詛を口にしたりした。

「ま、そういう事はさっき言った湖近くの館にある図書館で調べるといい。最も、命が惜しかったらあそこの館には近づかない方がいいんだけど。……つて、聞こえてないね。」

河童は苦笑いしながら男に問いかける。

「どうしようか、これ。ちよつと深刻じゃない？」

男はやれやれといった感じで、

「…まあ割とよくある光景だ。……俺もこうだったからな。」

ポツリと呟いた。聞こえたのか聞こえていなかったのか、河童は笑っていた。

会社員C - 03 (後書き)

ここまでで一段落となります。

次回の投稿はちよつと遅れるかもです。

投稿エラー減びろ。

『植物に適した土壌と肥料がわかる程度の能力』（前書き）

東方二次創作、オリ主、オリキャラが登場します。

オリ主が生理的に受け付けられない方は、戻るをクリックすること
を推奨します。

現状、野郎しか出てきません。

遅れて申し訳ございません。

『植物に適した土壌と肥料がわかる程度の能力』

「その畑には後二袋、あっちの畑は…そうだな、いつも使ってる肥料を7割程度にして、倉庫の右奥にある肥料を半袋混ぜて撒くと良いとおもう。」

彼が畑を見回りながら指示を出していた。

「あーそちの畑は…うん、どうにも枯れてるから少し休ませた方が良いかな。……あ、待ってくれ、丘の辺りから白い花の草を土ごと持ってきて、それを畑に植えておくと良い。そうすれば回復が早まる気がする。」

言葉尻は濁しているが、かなり具体的な指示を格畑の作業者に飛ばしている。

そう、これが彼に目覚めた能力、『植物に適した土壌と肥料がわかる程度の能力』

もともと本人は非常に気に入っていない能力なのだが、

「やほー、どうだい盟友、能力の調子は。」

頭頂部に毛のない男が気の抜けた声で彼に話しかける。男は河童F、割とよく見かける河童だった。

「便利ですよ、ええ、本当に便利です。悔しいくらいに。」

彼は憎憎しく、そう答えた。

事実、彼は自身の能力を全く気に入っていないが、役に立っていないわけではない。なかった。

彼の能力は村で畑仕事を営む者たちからは歓迎されたし、その能力で食い扶持に困っていないのも事実であった。

何しろ的確なのだ、ここ数日で明らかに作物は力強く育っている。

今年の豊作は約束されたようなものだろう。

「そう邪険するなよ、良い能力じゃないか。誰も傷つけず、利をみなに振舞うことが出来ているんだから。」

満面の笑みで河童は言った。

「それで今日は何の用ですか？」

彼は河童に尋ねた。

数日過ごしてわかったことだが、この河童が村にやってくるときは割と面倒な案件を抱えていることが多いようだ。

その証拠に村の次期村長はこの河童に何か言われるたびに顔に影を落とし、しばらく後には露骨に不機嫌な顔になっているからだ。

どうも今日はその不機嫌な顔をする役回りが自分に回ってきたらしいと、彼は感じた。

「ああ、そうそう、割と大事な用事なんだけど…これ、なんだかわかるかな？」

河童はそう言い、何かの種のようなものを取り出した。

「植物の種っぽいんだけど、水に浸しても、土に植えても芽が出ないんだ。君の能力なら芽吹かせることができるんじゃないかって思ってたね。」

彼はそれを手にして少し考えて一言。

「…植物じゃなさそうですよこれ、どっちかっていうと…動物的な…。」

ニコニコしながら河童が彼の答えを待っていた。

「でも植物なのかな…ちょっとおぞましい感じの物を用意すれば芽吹くみたいですよ。」

あまり言いたくない感じで彼は河童に告げた。

河童はその答えを聞いて顔を輝かせた。

「そっか！やっぱり君に頼んでよかった。それでどんなものを用意すればいいんだい？」

最初は話したがらなかった彼であったが、河童の粘りに負けて芽吹くであろう条件を話してしまった。

「よしよし、これでこいつを活かせるよ！ありがとう、君のその能力は素敵な能力じゃないかやっぱり！」

河童はそういうと急ぎ足で帰って行った。

結局の種だったのか聞きそびれたなあと思いながら彼は仕事に戻っ

た。

その日一日何の種なのか気になってしまい、苦い顔をしていたら時期村長の男に心配されたのは別のお話。

…後日、山で触手的な何かが大暴れすることになるのだが、それもまた別のお話。

『植物に適した土壌と肥料がわかる程度の能力』（後書き）

本筋が

進まなく

なったので

小話で

お茶を濁す

作戦。

次回はもっと遅れます。

1を2に・01（前書き）

東方二次創作、オリ主、オリキャラが登場します。

オリ主が生理的に受け付けられない方は、戻るをクリックすること
を推奨します。

現状、野郎しか出てきません。

投稿が遅れてごめんなさい。

彼が幻想郷に流れ着いて早数週間が経とうとしていた。

初めは自身の能力に嫌悪感以外の感情を抱かない彼であったが、時間という特效薬が彼の心を少し癒し、周囲とも時代に打ち解け、それなりに彼のモチベーションも回復したところに事件はおきた。

「ふう、ひと段落だ。……そういえば、気になってることがあるんだけど…。良いか？」

彼は男の背に尋ねた。男はピクリと眉を動かし、クルリと振り返った。

「なんだ、俺の能力の質問以外なら承るぞ。」

釘を刺されてしまった。が、彼はこんなことでめげる性格ではなかった。質問を続けてしまった。

「いや、まさにその能力のこと…。ふとあんたの能力が気になってさ…。」

ピクツと男同様を見せ、彼の眼を見据えた。彼を見るその眼からは、いつになく真剣なオーラが放たれていた。

「聞くか、それを。」

重圧を込めた声で男が聞いた。

ただ事ではない、彼はそう感じたが、

「いや、どうしたんだよ、ちよつとした好奇心で聞いただけだって、そんな凄まじいでくれよ。」

墓穴を掘るタイプの弁明を行った。当然、男の反応は極めて冷たいものだった。

「そうか、ならいらぬ詮索はしない方がいい、…好奇心はにゃんこを殺す。」

男なりのジョークだったのだろうが、ひたすらに重い口調で言われ
ては、ピクリとも笑えなかった。

場面は変わって、河辺で男が二人釣りをしながら談笑していた。

「ってことがあったんですよー。教えてくれてもいいと思うんですけど…、どうかな河童Fさん。」

彼は今朝のことを、知り合いの河童に相談していた。

「あはは、彼らしいっちゃ彼らしいね、気を使ってるんだよ。それなりに。」

笑いながら河童が答えた。

「ほら、キミこの前能力を調べたときひどく落ち込んでただろう？それで言わなかったんだと思うよ。…彼の能力も大概な物になってしまったからね。」

大概とはどういうことか、含みのある言い方に、詳しく言及をしようとすると。

「まあ、詳しい事は本人に聞くといい。僕の口からは言えない…言えるけど言わない方が面白そうだ。」

楽しそうに河童がいう、この河童が良い河童なのは確かだが、時々ちよつと良い性格をしている。

「わかりました、本人に聞いてみますよ。」

彼はそう答え、農作業に戻ろうときびすを返したが、河童が呼び止めて一つ警告を発した。

「あ、そうそう一応言っておくね。キミなら大丈夫だとは思うけど、もし万が一喧嘩になったら、キミじゃ彼に絶対に勝てないから、喧嘩だけはしないようにね。」

絶対とは、なかなかひどい言われようだ。そこそこ身体は鍛えてるつもりなんだが…。そんなことを思いつつも、礼を言っただけは人里への帰路へついた。

「さて、今日は…月が丸い日だったかな。」

彼が去った後、河童はポツリと呟いた。

帰路、夕刻の道を釣りの獲物を肩から提げ、彼がのんびりと散歩気分で歩いていると一人の男が道に立っていた。

よく見知ったその顔に彼は声をかけたが、反応がなく、どうにも様子がおかしい。

「…おい、大丈夫か？ 様子がおかしいが、里で異変でもあったのか？」

彼は男にそう声をかける。

「…したのか？」

ボソツと男が彼に問いかける。

聞き取れず、彼は男に聞き返した。

「河童Fは、俺の能力のことをお前に話したのか？ って聞いたんだ。」

「

明らかな問い詰める語気、彼は気圧されながらも、

「い、いや、本人に直接聞けって言われたよ。」

しどろもどろになりながらそう答えた。

「そうか、河童Fに聞いたんだな。俺の能力のこと。」

明らかにこちらの声は聞こえていない、眼が虚ろだ。

「聞いちまったなら、もう遠慮しなくていいよな、お前が俺を拒絶するなら、俺もお前を拒絶していいよな。」

男がとても聞き取れない声でそう呟くと、何かに吹き飛ばされるような感覚とともに彼は川に落ちた。

「…河童Fか、あいつも拒絶するような気がしていたんだ、今回で終わらせないとな。」

男はそう呟き、川を上っていく気泡を眺めていた。

「…ゴホッ！」

しばらくして、彼は息を吹き返した。

「大丈夫かい？ 面白いことになるかもって後をつけてみたら、面白いじゃすまない事態になってたみたいだ。」

河童Fが申し訳なさそうに彼に説明を始めた。

「どこから説明をしようか、…そうだね、全部話をしよう、そうだな彼の能力は壱を式にする程度の能力なんだ。」

彼は思わず聞き返してしまった。なぜか、あまりに理解に困る能力だったからだ。

「うん、確かに彼の能力なかなか厄介だね。」

河童Fは説明を続けた。大まかにまとめると

・物質を増やそうとする際には、どこから補わなければならない。
・1を2にする事は出来るが、2を4にする事は出来ず、2は3にしかできない。

・最近になって能力の変質が起こり、現在の能力になってしまったため操作がうまくいっていない。

と、言った感じた。

「つまり今回のケースは…。」

彼はいやーな予感とともに尋ねた。

「うん、暴走だね。…キミに対しての罪悪感と言うかそういう感情を能力で勝手に増幅してしまったんだな。」

サラリと河童がいう。…洒落になっていないことに気づいた彼は思わず大声をあげる。

「ちよ、ど、どうしたらいいんですか!!」

河童がのんびりと答える。

「どうしようかねえ…。」

…しばしの沈黙が流れ、

「ま、なんにしても急がないとまずいのは確かなんだな。…さつき能力の変質って言ったよね。」

先ほどよりも若干まじめな口調で河童が語り始めた。

「あんまり多くは見て無いんだけどね、能力の変質が起きるケースっていうのは、その存在の本質が変わるときに多いんだ。」

疲れた頭に優しく無い言い方だ、もう少しわかりやすく言ってくれればいいのに。

「つまりこのままだと彼は人間やめちゃうと思うよ。」

あつさり、ひどくあつさり、と重要なことを言い放った。

「……、じよ、冗談ですよ。」

彼は一言を紡いだ、その声は震えていた。

「こんなこと、冗談じゃいえない。」

至極真面目な声で河童は答えた。

「おっと、ちよつと待つんだ。飛び出そうつたって、そうはいかない。今君に死なれると、暴走した罪悪感でもう一人死人が増える。」

腕をつかみ河童は諭した。

「あと、大事なことを言い忘れてたけど、彼は……なんていうかな、概念的なものも増やせるんだ……すこしなら。」

またわけのわからないことを。彼は若干の苛立ちを覚えた。

「僕的能力じゃないから、なんて表現したいいいのかは、わからない。簡単に言ってしまうれば彼は時間とかそういうものも増やすことができる。」

……思わず彼は突っ込む。

「……ち、チート過ぎる。」

河童もそれに賛同して、溜息をついた。

「そうなんだよ、どうしようかねえ……。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4487v/>

東方村人C

2011年11月13日08時28分発行